

研究所報

目次

研究所再確認	1
2005年度「指定研究」研究組織一覧	2
2005年度「指定研究」研究目的紹介	3
2005年度「一般研究」選考結果発表	6
2005年度「一般研究」研究目的紹介	7
海外調査出張報告	10
学会参加報告	15
特別研究員研究成果報告	18
彙報	20

研究所再確認

真宗総合研究所長 沙加戸 弘

大谷大学真宗総合研究所は、1981年6月1日に発足してより今日まで、大略四半世紀の星霜を閲した。発足にあたって当時の廣瀬果学長は、「研究所報」同年11月3日付創刊号の巻頭に、「新しい研究所に期す」と題して、

教育と研究との相関々係を限りなく密接にして行くための努力が、大学自体の責任に於て具体的に促進されなくてはならない——中略——大学が付置の研究所を設けなくてはならない必然性は、このような大学であることの本来的課題を果す、という一点にある

と記し、さらに

大谷大学真宗総合研究所は、いわゆる特定の研究所員を常置するシステムをとっていない。従って、研究それ自体が研究所の内実なのである。それだけに、指定研究にしても一般研究にしても、平等に大谷大学の課題を担っている

と述べておられる。

すなわち、大谷大学真宗総合研究所の内実は研究そのものであり、その研究は大谷大学の本来的課題を果すものである、と定義されたのである。

大谷大学の本来的課題であるから、それは大谷大学の構成員全てに共有される普遍的課題であると共に、その研究は大谷大学の存立の精神が具体化されてゆく道筋を示すものともならなければならない。

具体的には、1981年度指定研究として、「真宗総合研究」と「大蔵経学術用語研究」、客員研究員による研究として、「英文による清沢満之の作品解説の紹介」が開始されたのである。

十年を経た1990年度には、指定研究「大学開放と生涯学習の研究」の具体的成果として、9月25日「開放セミナー」が発足した。第一回の「開放セミナー」は、寺川俊昭教授による「親鸞の世界——『教行信

証』——」全五回と、岩田慶治教授による「文化人類学から見た自然、『風景』、宗教」全三回であった。

この十年、「研究所報」は二十五回の刊行を見、十一年目を迎えた1991年度には、指定研究は特定研究として「大谷大学史編纂研究」、「国際仏教研究」、「大学開放研究」の三件、同じく委託研究として「真宗史料研究」、「西藏文献研究」、「大蔵経学術用語研究」の三件で計六件、一般研究は共同研究が三件、個人研究が二件であった。

二十年後の2000年度の研究内容は、2001年3月刊行の「研究所報」39号にその一覧と研究目的紹介がある。指定研究として特定研究三件、委託研究五件の計八件、一般研究として共同研究三件、個人研究三件である。1991年度からの十年、「研究所報」は十四回の刊行となり、かつその所載の報告内容はほぼ一年のずれを生じたことになる。

筆者は2002年3月29日付の「研究所報」40号に、

大谷大学の真宗総合研究所にかけられた願いは「能」である。総合施設の中に場所を占めること、言いかえれば「所」ではない。それも、大谷大学全体を研究所とする働きを牽引してゆく役割を果すことである。

大谷大学自体を情報とし、大谷大学を世界に届ける、その働きの牽引の役割が、今、真宗総合研究所に求められている。

と記したが、この考えは大筋において今も変わらない。

そのためには、研究課題が真に本来的なものであるかという普遍性の確認と、大学全体が課題を共有してゆくための透明感の維持と、研究活動の公正かつ適切な運営が、何よりも大学付置の研究所として重く考えるべき責務であると認識されなければならない、と考えている。

2005(平成17)年度「指定研究」研究組織一覽

研究名	研究課題及び研究組織
大学史研究	<p>研究課題 大学史関係資料の収集・整理・公開</p> <p>研究員 織田 顕 祐 (チーフ・助教授・仏教学) 水島 見 一 (助教授・真宗学) 東 館 紹 見 (専任講師・日本史学)</p> <p>嘱託研究員 福 島 栄 寿 (真宗大谷派教学研究員)</p> <p>研究補助員 加 藤 基 樹 (博士後期課程満期退学) 橋 本 真 (博士後期課程満期退学) 日 野 圭 悟 (博士後期課程満期退学) 森 剛 史 (博士後期課程第3学年)</p>
国際仏教研究	<p>研究課題 諸外国における仏教研究の動向の把握と必要資料の整理・収集・公開</p> <p>研究員 Robert F. Rhodes (チーフ・キャップ・教授・仏教学) 門 脇 健 (キャップ・教授・宗教学) 桂 華 淳 祥 (教授・東洋史学) 木 場 明 志 (キャップ・教授・国史学) 田 辺 繁 治 (教授・社会人類学・東南アジア人類学) 延 塚 知 道 (教授・真宗学) 木 越 康 (助教授・真宗学) 松 川 節 (助教授・人文情報学) 村 山 保 史 (助教授・西洋哲学) 李 青 (助教授・東北淪陷期文学・中国語) 井 上 尚 実 (専任講師・真宗学) 藤 枝 真 (専任講師・西洋哲学)</p> <p>嘱託研究員 田 村 晃 徳 (本学任期制講師) 羽 田 信 生 (毎田周一センター所長) Michael Pye (本学客員教授・マールブルク大学名誉教授) Jan Van Bragt (南山大学名誉教授) Mark L. Blum (ニューヨーク州立大学助教授) Paul Watt (デポー大学教授) Elisabetta Porcu (本学特別研究員) Ugo Dessi (本学特別研究員)</p> <p>研究補助員 斉 藤 研 (博士後期課程第3学年) 小 澤 千 晶 (博士後期課程第3学年) 山 本 琢 (博士後期課程第2学年) 宮 本 浩 尊 (博士後期課程第1学年)</p>
西蔵文献研究	<p>研究課題 チベット語文献のデータベース化</p> <p>研究員 小 谷 信千代 (チーフ・教授・仏教学) 白 館 戒 雲 (教授・仏教学) 福 田 洋 一 (教授・仏教学) 兵 藤 一 夫 (教授・仏教学)</p> <p>嘱託研究員 三 宅 伸一郎 (専任講師・チベット学) 野 村 正次郎 (本学特別研究員) 井 内 真 帆 (博士後期課程満期退学) 櫻 井 智 浩 (本学非常勤講師)</p> <p>研究補助員 都 真 雄 (博士後期課程第3学年) 目 片 祥 子 (博士後期課程第2学年)</p>

2005(平成17)年度「指定研究」研究目的紹介

大学史研究

大学史関係資料の 収集・整理・公開

チーフ・助教授 織田 顕祐
(仏教学)

1、本研究の中長期的な目的

『大谷大学百年史』『清沢満之全集』の刊行を経た今、清沢を軸として清沢以前の学寮時代(近世)と清沢以後の大学の歩み(近代)の関係という観点から、これまで個々になされてきた研究成果を集大成する必要があることが改めて思われる。こうした作業を通して、必要文書・文献を収集し、整理・公開していくことは、結果的に更に深く本学の歴史と学事を研究することになる。その研究の成果としての『大谷大学350年史(仮称)』刊行を中長期的な目的とする。

2、当面3年間の全体像

- ①『清沢満之全集』刊行の事後処理(テキストデータの完成、未公開清沢満之自筆資料の翻刻・整理など)を完結する。
- ②佐々木月樵研究のための資料調査収集。
- ③『百年史』刊行時収集資料(通称「黒ファイル」「青ファイル」)の整理を終了し公開する。
- ④近世学寮学事把握のための基本事項の整理(近世学寮年表の作成)。
- ⑤この他に、東本願寺教団現代史の調査研究をすすめる。

3、昨年度の成果

- ①『全集第7巻』までのテキストデータベースの修正が終了。未公開清沢満之自筆資料のうち日本語で書かれたものの粗究的な翻刻を終了。
- ②未着手
- ③「黒ファイル」保存整理用の中性紙箱・封筒の準備がほぼ完了。「青ファイル」は整理が終了し、公開のための準備中。
- ④近世学寮年表のフォーマットを検討し、東西両本願寺が比較できるようなものとした。文久年間程度まで入力済み。これと並行して学寮史を検討するために、これまでの研究等を調査し必要資料を収集した。

- ⑤注目すべき事柄の絞込み作業を通して全体の概要を把握した。新たに必要資料を相当数コピーした。研究班ホームページの試作品を作成した。

4、今年度の研究内容

- ①『全集』については、前期中に全ての作業を終了する。未公開の清沢満之自筆資料については、作業を継続する。
- ②すでに公開されている著作目録等に基づいて、資料収集を開始する。
- ③原資料の移管に着手する(この作業の全体的な仕事量は現在のところ不詳)。青ファイルは、研究班ホームページを立ち上げ、その中で公開する。
- ④当面の入力作業を終了し、著作等の存否の調査を開始する。この作業と並行して地方の学場などについても調査研究する。
- ⑤昨年の作業を継続する。

以上の研究に加えて、ホームページを可能な限り早急に立ち上げる。

国際仏教研究

諸外国における仏教研究動向の 把握と必要資料の整理・収集・公開

チーフ・教授 R. F. ローズ
(仏教学)

〔研究目的〕

本研究は、諸外国における仏教を中心とした宗教研究の動向を把握する〈受信〉とともに、国際社会に対して本学の真宗・仏教研究の成果を公開する〈発信〉ことを目的としている。上記目的の遂行のために、これまで以下の点から研究を進めてきた。

〈受信〉

- ①海外における仏教関係書誌の収集・整理と、デジタル・データベースの構築。
- ②海外仏教研究者を招聘しての講演会や研究会の開催。

〈発信〉

- ①真宗・仏教関連資料の翻訳出版。
- ②真宗・仏教系国際学会(会議)の企画・開催と、宗

教系国際学会への研究者の派遣。

〔研究計画〕

本研究班設置の主眼は、まずは海外における仏教研究の動向を常に把握することにある。そのため、〈受信〉①として、仏教関係雑誌や書籍の収集・整理作業が継続して行われている。〈受信〉②や、他の〈発信〉に関する研究業務については、本研究班は本年度より、英語班・ドイツ班・中国班・韓国班の4部門で研究をすすめることとする。それぞれの研究テーマ及び目的は、次の通りである。

—英語班—

〈研究テーマ〉

- ①諸外国における仏教研究動向の把握
- ②真宗・仏教関連資料の翻訳出版

〈研究目的〉

- ①本学における仏教を中心とした思想研究を推進するためには、国際社会における仏教研究の動向を把握することが重要な課題となる。そのため英語班では、これまで国際学会への研究員の派遣や国際学会の企画開催などを継続して行ってきた。今後も、国際社会に常にアンテナを張り、情報収集ならびに本学仏教研究の発信に努めていきたい。
- ②親鸞の思想を世界に発信することを重要な研究課題の一つとしており、近年はいわゆる「近代真宗教学」の翻訳に取り組んできた。現在はニューヨーク州立大学 The State University of New York からの出版に向けて作業中である。また、本年度はあらたに、清沢満之による真宗大学「開校の辞」の翻訳作業などを進めていくこととする。

—ドイツ班—

〈研究テーマ〉

仏教・他宗教比較研究

- ①「プロテスタント神学との対話」
- ②「近代化された宗教特に浄土真宗の社会的観点からの研究」

〈研究目的〉

- ①「プロテスタント神学との対話」
マールブルク大学神学部との研究交流を中心にしながら、浄土真宗とプロテスタント神学との対話・比較研究を継続していく。
- ②「近代化された宗教特に浄土真宗の社会的観点からの研究」
フランス国立高等学院 (EPHE) の宗教社会学部門

との交流を開始するあたり、2006年開催予定のシンポジウム『宗教と近代合理的精神—日仏文化の比較を通して』の開催準備をする。

—中国班—

〈研究テーマ〉

中国東北・東部モンゴル地域の宗教と文化

〈研究目的〉

中国東北地域（いわゆる満洲）と東部モンゴル地域（内モンゴル自治区東部）における宗教及び関連文化の諸相を、歴史史料による再構成及び現地調査によって明らかにする。

「満蒙」、すなわち中国東北地域と東部モンゴル地域とでは、宗教の諸相は一変し、仏教においても、前者には中国仏教が、後者にはチベット仏教（いわゆるラマ教）が流布する中に、さらに日本がもたらした日本仏教が一時期存在していたというのが事実であろう。両地域の宗教を併せ監督統御しようとしたのが「満洲国」期であった。しかるに、両地域における宗教についての信頼すべき調査報告はほとんど存在しないというのが実情である。中国側が主たる研究地域としてこなかったことが大きい。日本による戦前の調査報告もまた、実際を伝えているとは言えない恣意的あるいは誤解に満ちたものが多い。これら歴史史料を再検討しつつ、中国側研究者の協力を得て、共同研究というかたちで現地調査を行い、今日的レベルの研究を推進させていくことが、本研究の主目的である。

—韓国班—

〈研究テーマ〉

仏教における信の問題

〈研究目的〉

日・韓国は、現に大乘仏教が生きている国として、古来より深い関係を持ってきた。現在では、韓国においては、現に比丘・比丘尼が僧院の中で研究修行するという事実があり、その伝統の上で複数の大学において仏教が学問的に研究されている。一方、日本では古来からの大乘仏教の伝統の上で、近代的な方法論を取り入れた仏教学が学ばれている。この両者が共同研究することにより、互いの見えない点を発見し、より大きな視点からの仏教研究を推進しようとするのが本研究の目的である。

2004年からの3年間は、「仏教における信の問題」を共通テーマとする。

西藏文献研究

チベット語文献の データベース化

チーフ・教授 小谷 信千代
(仏教学)

本研究課題は、学内外のチベット語文献を調査・整理し、データベース化を進めることによって、チベット研究の基盤を構築し促進をはかることを目的としている。その目的を達成するために、本年度は具体的に以下の課題に取り組む。

1. 大谷大学図書館所蔵チベット語文献のデータベース化

A. 北京版カンギユルの研究

1997年に完結した『北京版西藏大蔵経勘同目録』刊行事業は、本学チベット研究の軸をなすものであり、すぐれたリファレンスとして評価は高い。そのうち、1930～32年刊行の『^{カンギユル}甘殊爾勘同目録』(3分冊)はすでに絶版・入手困難であり、合冊復刊を望む声は大きい。本研究班ではそうした声に応える形で、数年前よりこの目録の一部電子化に取り組んできた。今年度は、これまでに蓄積したデータや最新の研究をもとに、『甘殊爾勘同目録』の補訂必要箇所確定をおこなう。

B. 大谷大学図書館所蔵蔵外チベット語文献の研究

大谷大学図書館所蔵蔵外チベット語文献にはいくつかの未公開の稀観書がある。今後、これらを翻刻・電子テキスト化・研究・公刊する必要がある。今年度はそうした稀観書の一つ、ゲイエ・ツルティム・センゲ (dGe ye Tshul khrim seng ge) 『インド・チベット仏教史 (*rGya bod kyi chos 'byung rin po che*)』(蔵外 no.11847)の校訂テキスト(原本の写真および固有名詞 index を含む)刊行ならびにデータベース公開をおこなう。

2. Tibetan Langage Kit のバージョン・アップ

フォントおよびキーボード・レイアウトは一定程度まで完成しているが、ワード・ラップが正常に行われぬなど、未解決の問題をはらんでいる。こうした問題について、将来をにらみつつ、バージョン・アップの可否

を含め、今年度中に決着をはかる。

3. 現地研究機関との提携

西藏社会科学院(チベット自治区ラサ)と提携し、共同研究を推進する。年度内提携締結に向け、現地の様々な事情を考慮しつつ、必要とあらば、研究班スタッフの再度訪問もしくは西藏社会科学院院長の招聘をおこなう。

4. パーリ語文献研究の終了に伴う、収集資料の整理と研究

パーリ語文献研究が収集した『パンニャーサ・ジャータカ』に関わる資料のうち、今後の研究の便を考え、クメール文字版(パーリ語)ならびに北タイ文字版(現地語が混交したパーリ語)のローマ字転写および電子テキスト化をおこなう。

2005(平成17)年度「一般研究」選考結果発表

(A) 共同研究

研究代表者	研究課題及び研究組織	補助金
佐々木令信	研究課題 平安時代古記録の研究 研究員 佐々木令信 (教授・日本仏教史学) 東館 紹見 (専任講師・日本仏教史学) 協同研究員 頼富 本宏 (種智院大学長・教授) 赤尾 栄慶 (京都国立博物館文化資料課保存修理指導室長) 杉本 理 (本学非常勤講師) 堅田 理 (本学非常勤講師)	200万円
山本 貴子	研究課題 蠟管音源のデジタル化：蠟管蓄音機の再現 研究員 山本 貴子 (助教授・図書館情報学) 片岡 裕 (教授・情報工学) 協同研究員 千秋 一樹 (Office やまと研究開発担当)	200万円
若槻 俊秀	研究課題 法苑珠林の総合的研究 研究員 若槻 俊秀 (教授・中国文学) 石橋 義秀 (教授・国文学) 乾 源俊 (教授・中国文学) 佐藤 義寛 (教授・中国文学) 浦山あゆみ (助教授・中国文学) 采翠 晃 (専任講師・仏教学) 協同研究員 西尾 賢隆 (花園大学・教授) 長谷川 慎 (本学任期制助手) 早川 智美 (本学任期制助手) 本井 牧子 (本学任期制助手)	200万円

(B) 個人研究

研究代表者	研究課題及び研究組織	補助金
加来 雄之	研究課題 安田理深「願正論ノート」の研究 研究員 加来 雄之 (助教授・真宗学)	100万円

2005(平成17)年度「一般研究」研究目的紹介

共同研究

平安時代古記録の研究

研究代表者・教授 佐々木 令信
(日本仏教史学)

本研究は、本学に所蔵される平安中期の貴族藤原資房(1007~57)の日記『春記』(重要文化財・長久2年2月条)の研究を通じて、本史料の歴史的な性格や特徴を明らかにし、かかる研究の成果に基づき、当該期の政治・宗教・文化・社会全般について解明することを目的とする。

本学所蔵の『春記』長久2年という時期は、藤原頼通政権の時代に相当する。この時代は、他に現存する貴族の日記〔古記録〕が少なく、『春記』は同政権の実態や構造を知る上で、数少ない甚だ貴重な史料といえる。

前年度の研究では、『春記』本文と紙背の『大日経秘要抄』との関係、本文の書写年代、紙背の『大日経秘要抄』の内容的特質、さらには、記主藤原資房の蔵人頭としての活動実態や小野宮流藤原氏の動向などの研究成果が得られた。

本年度は、前年度で得られた研究成果を踏まえて、本学所蔵本と同様に、京都の東寺(教王護国寺)に架蔵されていた京都国立博物館所蔵本・宮内庁書陵部所蔵本『春記』本文及び紙背の書誌学的・歴史学的な比較検討作業という残された課題に取り組むたいと考えている。さらには、所期の課題への取り組みを通じて、本来所蔵していた東寺が、『春記』を書写・所有する必要性という新たな研究テーマについてもせまりたい。かかる検討作業で得られる成果に基づいて、藤原資房の仏教信仰や世界観などについても把握・理解したいと考えている。

こうした諸点を展望しつつ、本学所蔵本も含む東寺架蔵の類本について、前年度に引き続き調査を進める一方、定期的に研究員・嘱託研究員による研究会を開催していきたい。おおまかな分担として、『春記』と藤原資房の仏教信仰については佐々木・東館が、『春記』と東寺の寺院・僧侶との問題については頼富が、書誌学的考察を赤尾が、『春記』における政治・文化・社会については堅田・杉本が、それぞれ行う。こうした研究活動を通し

て、それぞれの専門分野の知識と成果を総合化し、本学所蔵『春記』の内容・性格の全体的解明に寄与することが可能になるものと考えている。

共同研究

蠟管音源のデジタル化

研究代表者・助教授 山本 貴子
(図書館情報学)

真宗総合研究所「大谷大学データベース研究」では、研究テーマの一つとして、「大谷大学図書館所蔵北里蠟管資料のデジタル音声データベース化」が取り上げられた。北里蠟管資料とは、北里闌氏が、日本語の起源について1920(大正9)年から1931(昭和6)年まで国内(沖縄、東北、北海道)および海外(台湾、フィリピン他)で調査した際、現地のことばを録音したものである。

本学には、そこで録音された蠟管が約230本と、その際使用されたEdison式蠟管蓄音機2台が収集されている。録音当時は現在のようにマスメディアが発達しておらず、他からの影響を受けることがなかったため、それぞれの言語本来の発音やアクセントが録音されているなど、極めて貴重な資料である。そこで、北海道大学などの研究者が、昭和61・62年度文部省科学研究費補助金総合研究(A)で音声の再生・解析を行ったが、レーザービーム反射型再生システムを採用したことにより、期待した成果が現れなかった。

一方、昨年度、真総研データベース研究班では北里闌の蓄音機(北里蓄音機)の修復を行った。しかしながら、北里蠟管・蓄音機はそれら自体に歴史的価値があるので、現時点では鏽の研磨やカビの除去など部分的な修復に終わってしまった。そのため、修復後でも回転ムラや共振などによるノイズが起り、ソフトウェアによる補正が可能な再生品位ではない。また、北里蓄音機で北里蠟管の再生作業を行うと、蓄音機自体が北里蠟管を損傷する危険が高い。

当時の蓄音機は非常に精度が高く、音声の品質は人の肉声と変わらなかったと言われている。音声よりノイズ

が大きく聞き取ることができないということは、すなわち、それだけ蓄音機が劣化したということに他ならない。

そこで、本研究では、北里蠟管から識別可能な音声を再生するにあたって、まず現時点での蓄音機の精度の検証と当時の蓄音機の精度の調査、次に、蓄音機の修復および修復が成功したかどうかの検証を行うことを目的とする。

共同研究

『法苑珠林』の総合的研究

研究代表者・教授 若槻 俊秀
(中国文学)

『法苑珠林』一百巻は、中国にもたらされた仏教の世界観を含めて丸ごと伝える仏教類書として、日本仏教の淵源でもある中国仏教を、全体として考えるときの、宝庫であるとされているものである。

そこには、今は佚してしまった翻訳經典や、中国で作られた偽経が保存されていたりして、漢訳仏典や、中国仏教学、仏教史の研究に貴重な資料を提供したり、また文学の分野からも説話、伝奇類の宝庫として利用すべきものが多い。なかんずくわが国においては、『今昔物語集』震旦の部に本書を典拠とするもの、あるいは関連するものが数多くあり、長い間大切に読みつがれてきている。

このように価値ある性格を有するものでありながら、本書の本格的な研究は少なく、殆ど進んでいないといってもよい程の現状である。このような状況に鑑み、ここに共同研究班を結成し、本書の総合的な研究を実施したいと考えた。

本書の性格上、多方面にわたる専門領域のメンバーによる検討が求められるのであるが、幸いにも本学には本書研究のために大変相応しい專家が揃っており、諸氏の力を結集することによって、研究を大きく推進する環境が整っていることから、当該分野の新知見開発が大きく期待できると考えている。

研究推進のために、毎週の研究会を催し、本書について会読、討議等を行い、その結果を整理しながら順次公開すべく進める予定である。更なる願いとしては、日本

文学においては、仏教文学という領域を確立させているが、中国仏教文学というような領域を確立させることを少しでも進めることができればということである。将来への願いの実現の為の、この一年が第一歩となるべく努力したいと考える次第である。

個人研究

安田理深「願生論ノート」の研究

研究代表者・助教授 加来 雄之
(真宗学)

安田理深(1900~1982)は、大谷大学在職中、昭和36年度より昭和41年度までに願生論と題する講義を行った。没後、その講義のために記された緻密な準備ノートが五冊発見された。本研究の目的は、この願生論についての準備ノート全五冊(以下「願生論ノート」)を翻刻、校訂し公開すること、あわせて安田の教学が近代・現代思想にもつ意義を研究することにある。

上述の講義は、6箇年の間、一貫して願生という主題のもとに、毎年異なった課題を立て、願生の問題が体系的に論じられている。たとえば昭和36年度は唯識教学を通して願生を意識構造から基礎づけようとするものであった。これらの「願生論ノート」は、61歳から65歳という安田のもっとも充実した時代の思索が刻み込まれている。伝えるところによれば、安田は大谷大学に対する深い責任感と情熱をもってこの講義に取り組み、そのことが6カ年の講義のあとに結核に倒れる一因になったという。

周知の通り、安田の教学は現代の大谷派教学に大きな影響を与えている。昨今、安田の唯識教学、哲学、キリスト教神学などとの対話的方法による真宗・仏教研究が、宗派外や海外でも注目されつつある。たとえば指定研究国際仏教研究班において安田の翻訳を担当したポール・ワット教授はアメリカで安田の翻訳と研究についての著作を計画している。

さて安田の著述は、これまでも『安田理深選集』全22巻、『安田理深講義集』全6巻など多数発刊されている。しかし、そのほとんどが雑誌論文もしくは講読・講義の記録であり、安田の自筆による組織的な著述はなかった。このことが安田の思想を体系的にとらえることを困難に

してきた。この「願生論ノート」の公開は、このような状況を大きく変える可能性をもつ。『無量寿経』の主題が願生であることは世親菩薩の指摘であるが、また真宗大谷派の近代教学を特徴づける主題でもある。この主題が安田理深の広く深い関心から掘り下げられた記録が公開されることは、これからの真宗大谷派の現代教学における意義のみならず、親鸞の浄土思想と他のさまざまな思想とが対話する上でかけがえのない基盤を提供する意義をもつと思われる。

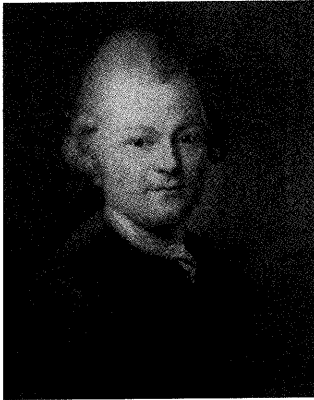
以下の方法によって研究目的を実現したい。

- (1) 上述した「願生論ノート」全五冊の翻刻・校訂とデジタル・データ化。あわせてこれらのノートについての解題・註を作成し、公開にそなえる。
- (2) 上記講義の現存録音テープのテープ起しと未確認テープの調査収集と保存。
- (3) 安田の住居であった相応学舎が所蔵する安田についての諸資料の調査・整理。
- (4) 安田所蔵の未公開資料の整理。たとえば曾我量深「浄土論聞記」(コピー)の翻刻など。
- (5) 安田理深の生涯に関する年譜資料の収集ならびに関係者に対するインタビュー調査などの実施。

海外調査出張報告

レッシング紀行

一般研究 研究代表者・教授 友田 孝興



2005年3月3日より17日にかけて、18世紀啓蒙主義の巨星であるゴットホルト・エフライム・レッシング Gotthold Ephraim Lessing の足跡歴訪と資料収集を主目的に、例年にない厳寒のドイツを、残雪に足をとられながら駆け巡ってきた。併せてその途上に点在するクロップ

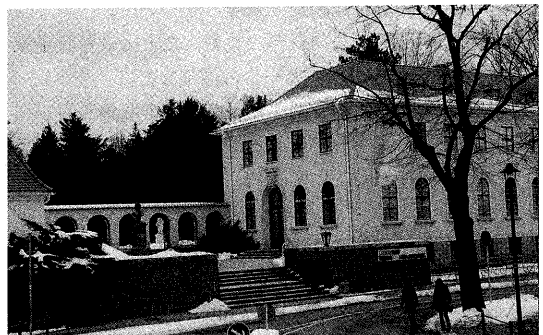
ヴォルフエンビュッテル時代のレッシング

シュトックやゲーテ、シラー、ハイネ等の遺跡にも足を運び、レッシングやこれらの詩人たちの作品とその思想世界を、それが生まれた風土のなかで、往時を偲びながら追体験する機会に恵まれたことは、今回の誰にも邪魔されない独り旅の最大の喜びであり収穫であった。

ドレーズデン Dresden：ドレーズデンはザクセン州の美しい古都である。1975年、今から30年も前のことになるが、ここを初めて訪れたときには、当時すでに戦後30年を経っていたとはいえ、町はまだいたるところで痛ましい戦禍の跡をとどめていた。とりわけエルベ川の近くに位置する聖母教会は瓦礫の山であった。ところが、1989年のベルリンの壁の崩壊後、瓦礫のひとつひとつに番号をふり、使える石材はすべて拾い集めて、もとの位置を推定しつつ復元するという、世界最大のパズルとまで言われた困難な作業を、ドイツ人は今日まで継続してきたのだ。驚くべき精神的エネルギーである。空爆から60年もの歳月が流れた。この節目の年を記念して、新旧の石を積み合わせながらの聖堂再建工事はまもなく終わりを告げようとしている。もう数ヶ月もすれば、この聖母教会は、聖母の名に相応しい昔日の美しい姿を取り戻すことであろう。竣工の日の早く訪れんことを願いながら、この町を起点にして、私のレッシング探訪の旅が始まった。

カーメンツ Kamenz：ドレーズデン・ノイシュタット

Dresden-Neustadt 駅から列車に乗り、深い雪の林をゆっくりと通り抜け、うっすらと積もった白銀に輝く大平原を進みながら、一時間かけて到着したのがレッシングの誕生地カーメンツである。ここは、ちょうど京都御所ほどの小高い丘の町だ。18世紀初めの人口は約2000人であったという。レッシングは1729年、ザクセンの片田舎のこの小さな町に、牧師の息子（12人兄弟姉妹の第三子・長男）として生をうけたのだ。



カーメンツのレッシング・ハウス

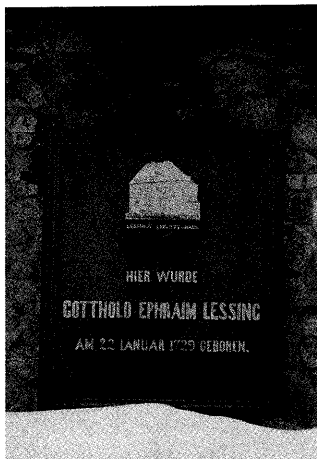


レッシング・ハウス前の胸像

駅舎を出て右手のなだらかな坂道を上っていくと、ほどなくして十字路に出る。左手の郵便局の角を曲がるとすぐにレッシング・ハウスだ。青銅でできた胸像のレッシングが私の訪問を喜んで迎えてくれた。建物は彼の生誕200年を記念して1929年に礎石が置かれ、31年に竣工。そしてその竣工のおりに、彫刻家のヘルマン・クナウル Hermann Knaur によって既に数十年前に作成済みのこの

胸像が、建物の入り口前に設置されたのだという。また、胸像の後ろの木々に囲まれた庭には、ヨハネス・ペツシエル Johannes Peschel 作の大きな石柱が建っている。生誕250年を記念して1979年に建てられたこの石柱には、レッシングの偉大な精神を代表する幾つもの名句が刻まれていた。「真実にあらざるものは如何なるものも偉大にあらざるなり」(...nichts ist groß, was nicht wahr ist)。よき報酬のために善をなすのではなく、「善なるがゆえに善をなす人間の完成の時代がきつとおとずれるであろう」(Sie wird gewiß kommen, die Zeit der Vollendung, da der Mensch das Gute tun wird, weil es das Gute ist)。「各人は彼(父)の清廉なる偏見なき愛を見習え」(Es eifre jeder seiner unbestochnen, von Vorurteilen freien Liebe nach!)等々の言葉が。一方、建物の内部の展示ホールでは、おりしも先生に引率された20名ほどの女子中学生たちが、壁一面に張られたイラスト入りの作品解説パネルを前にして、学芸員によるレッシングの生涯についての話を傾けていた。

展示品の数々に往時を偲びながら、その後、赤煉瓦造りの見事な市庁舎前を経て、その裏手の坂道を上り詰める。



生家跡の銘板

すると丘の頂上に、レッシングの父が牧師としての任に就いていた聖マリア中央教会 Haupt-Kirche "St. Marien" が聳えていた。そしてその塀際の小路を更に20メートルほど進むと、右手に、雪に埋もれた今はなき生家(1842年に焼失)の跡地が、ひとり寂しく、「ここにゴットホルト・エフライム・レッシング 1729年1月22日 生まれる」という銘板をもって私を迎えてくれた。昔日の生家の面影を僅かに偲ばせてくれるものといえば、残念ながら銘板上部に刻まれた、かつての建物の写し絵だけであったが、かえってそれだけに、幼少時のレッシングの生活状況を自由に思い浮かべることができた。恐らく彼は、この家の一室で父母から日々の基礎教育を受け、それが終ると、兄弟姉妹たちと一緒に、二階の窓から、目前に聳える教会を仰ぎ見るという毎日を送ったのであろう。

彼が1738年から41年まで学んだラテン語学校は、先に

見たレッシング・ハウスの前に建つ聖アンナ修道教会 Klosterkirche St. Annen の横にあった。今ではそれも建替えられてカーメンツ・中等学校になってはいたが、二つの入り口の一方には「知を学べ LERNE WEISHEIT.」、そしてもう一方には「徳を鍛えよ UEBE TUGEND.」との標語が大きく記され、レッシングの精神を今に伝えていた。

マイセン Meißen とライプチヒ Leipzig : カーマンツのラテン語学校を卒業したレッシングは、1741年から46年まで、焼き物の町として有名なマイセンの、ザクセン侯立聖アフラ校 Die sächsische Fürstenschule St. Afra



聖アフラ校の顕彰板

に学んでいる。町とエルベ川を一望できる丘の上には、15世紀に建造された美しいアルブレヒト城が聳えている。このお城の近くに、彼の学んだ聖アフラ校があった。当時の校地跡に、今ではギムナージウムの校舎が建ち、マイセンに相応しく、入り口の壁には陶板でもって、レッシングがここで学んだことが記されていた。

ところで、彼がここで過ごした1週168時間の生活内容とはどんなものであったのだろうか。ある学期の一例を参考までにあげてみると、「礼拝：11時間、宗教：14時間、授業：32時間、自習：25時間、復習：7時間、歌やダンス等の自由時間：17時間、食事：14時間、睡眠：48時間」であり、その内の32時間の授業内容については、「ラテン語：15時間、ギリシャ語：4時間、ヘブライ語：3時間、フランス語：2時間、哲学・修辭学：2時間、数学：2時間、歴史：2時間、地理：2時間」であった。英才教育の寄宿学校ならではの、このような1週間の生活・授業内容につくづく驚かされる。レッシングのマイセンでの生活は、このような学校規範に則っての毎日であった。しかも彼は、その明晰な頭脳と抜群の記憶力と旺盛な学習意欲のゆえに、グレーバナー校長をして、「二倍の餌を必要とする馬である。他の生徒にとっては難しすぎる授業も、彼にとっては易しすぎる。彼はもうここにいる必要はない」、とまで言わしめたのである。かくして、彼はこの学校を5年で卒業し、すぐにライプチヒ大学の神学部に入学することになる。

当時のライプチヒは小パリとまで言われるほどの文化と学問の大都会であった。美しい旧市庁舎やその近くに位置する、ゲーテの『ファウスト』の一場面にもなったアウエルバッハの地下酒場等が当時の面影を今に伝えて

いる。レッシングはここで先ず神学を学ぶのであるが、大都会の誘惑のなかで、急速にそれへの勉強意欲を喪失し、演劇や作家活動にはまり込んでゆく。そして1748年、彼はベルリンへと遁走するのだ。ライプチヒ時代のレッシングの住まいがあった所には、今ではガレリア・カウフホーフという大きな百貨店が建っている。往時の彼の生活を偲ぶよすがとなるものは、残念ながら、その入り口近くの壁面にはめられた小さな青銅の銘板（そこにはゲーテの名もあがっていた）のみであった。

しかしその一方で、私は今回、ライプチヒでは、郊外のゴリス城の近くにあるシラー・ハウスを、没後200年に当たる記念の年に訪ねるといふ幸運に恵まれた。しかもこの粗末な農家の建物こそは、清貧のシラーがケルナーらの厚き友情に対して大きな感謝と喜びを見出し、その喜びを、ベートーヴェンの「第九」の合唱で有名な「歓喜に寄せて An die Freude」という人類愛の頌歌にまで結晶さすに到った、意義深い場所でもあった。中庭を覆い尽くす純白の雪の中に佇んでいると、シラーの大いなる自由の精神が小さな粗末な建物から今も生き生きと溢れ出てくるのが感ぜられた。



ライプチヒのシラー・ハウス

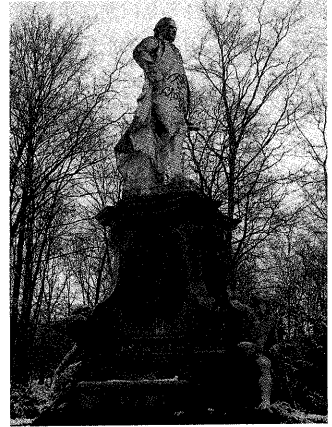
ベルリン Berlin とハンブルク Hamburg：ベルリンとハンブルク、これらの町はレッシングの哲学的・演劇的・「自由作家」活動の修業期と本格的活動期とを併せもつ足跡地である。

ベルリンでは、ブランデンブルク門の西側にひろがる、樹木に覆われた広大なティーア・ガルテン（動物公園）沿いに、かつての東西分断の壁の跡を少し南行する。すると右手の園内に先ずゲーテ像が、そして更に300メートルほど進むと、雪の林の中に、ペンキで落書きされたレッシング像が聳え立っていた。人間の愚行をその身をもって告発するかのよう。そしてこの彫像を眺めながら思い出されたのが、この地で彼と深い関係をもった、彼と同年輩のユダヤ人青年モーゼス・メンデルスゾーン Moses Mendelssohn（有名な同姓の音楽家の祖父、

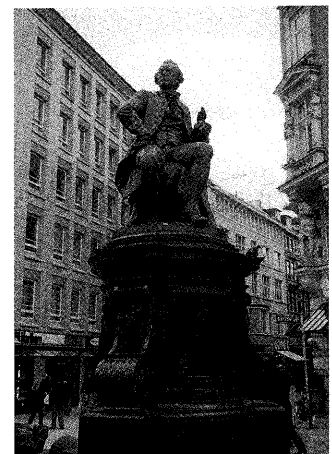
1726-86）のことである。彼との出遇い以前に、既にレッシングは『ユダヤ人たち Die Juden』（1749）という戯曲を通して、キリスト教社会の底辺に巣くう、ユダヤ人に対する愚かで非理性的な偏見や不寛容性が、いかにキリスト教の人間愛の精神と乖離しているかを告発していたが、まさにその告発の正当性を現実の場で証しするかのよう、善良高潔にして高邁な精神の持ち主であるユダヤ青年との運命的な値遇を、彼はベルリンの地において得たのである。そしてこの民族と宗教を超えた二人の親交は、レッシングの逝去に至るまでかわることなく深まり続いたのであった。

ハンブルクでは、ゲンゼマルクト広場（このそばに昔レッシングゆかりの国民劇場があった）に、座像のレッシングが鳩たちと戯れていた。頭や手にかけられた糞尿にも動ずることなく。そしてこのレッシング像の台座には、ギムナージウムの教授にして理神論者のライマールス Hermann Samuel Reimarus（1694-1768）の青銅でできた肖像板がはめられていた。二人の精神的交流がいかに深いものであったかが偲ばれる。後年、ヴォルフエンビュッテルの図書館長時代に、レッシングは、彼の未刊の遺稿『神の理性的崇拜者のための弁明あるいは擁護書 Apologie oder Schutzschrift für die vernünftigen Verehrer Gottes』を、死者に

正統派からの非難の火の粉がふりかからないよう名を匿して「ある無名者の断片」という形で公表する。しかしそれにもかかわらず、これに対して激しい非難の声を上げたのが、当地カタリーナ教会の正統派首席牧師ゲッツェ Johann Melchior Goeze であった。かくしてレッ



ベルリンのレッシング像



ハンブルクのレッシング像



レッシング像台座のライマールスの肖像

シングとゲツェとの間に、形骸化した真理を打ち砕こうとする側とそれを守ろうとする側との、いわゆる「断片論争」が繰り返されることになる。こんなことを思い起こしながら、私は鳩の糞尿に耐えるレッシング像に別れを告げた。

余談になるが、ハンブルクでの体験で特に印象深かったのは、中央駅近くのドイツ国立劇場 Deutsches Schauspielhaus で上演されたゲーテの『ファウスト』(演出：Jan Bosse / ファウスト：Edgar Selge / メフィスト：Joachim Meyerhoff / グレートヒェン：Maja Schöne)である。ここでは、これまでのオーソドックスな舞台観念を払拭し、ギリシャの円形劇場形式をとり入れ、ホールの中央に三重の上下・回転可動式の円形舞台を設置すると共に、俳優やコーラスも一般観客席に最初から紛れ込んでいて、突然立ち上がって演技をする、という特色ある演出形式がとられていた。つまり、観客席を含めた劇場全体が舞台となっていたのだ。私の目を見詰めてグレートヒェンが愛の言葉を叫んだときには、あたかも私自身がファウストにでもなってしまったかのような感動を覚えた。実に印象深い上演であった。

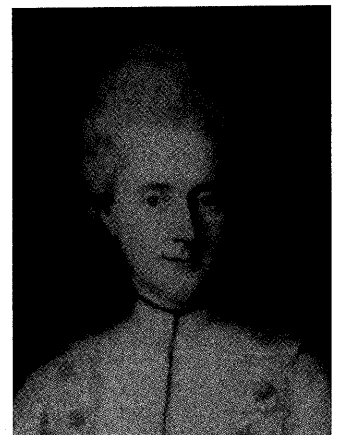
ヴォルフエンビュッテル Wolfenbüttel：レッシングが



ヴォルフエンビュッテルのナータン像
左：レッシング・ハウス 右：図書館

人生の最後の10年を送った町、それがヴォルフエンビュッテルである。ブラウンシュヴァイクから列車で10分のところにある大きな美しい町だ。それもそのはずで、ブラウンシュヴァイクに都が移る(1753)まで、ここにブラウンシュヴァイク-ヴォルフエンビュッテル公領の宮廷が置かれていたからである。1700年当時のこの町の人口は約12000人で、宮廷の文化的水準の高さを象徴する、ヨーロッパで最も有名な図書館の一つ「ビブリオテカ・アウグスタ Bibliotheca Augusta」を有していた。偉大な学者であるライプニッツ(G. W. Leibniz)が図書館長を務めたことも、この図書館をより一層著名なものにする大きな要因であった。レッシングが、カール一世(Carl I)の息子であるカール・ヴィルヘルム・フェルディナント(Karl Wilhelm Ferdinand)公の要請を受けて、この図書館の館長に就任したのは1770年のことであった。しかし当時既に都がブラウンシュヴァイクに移っていて、人口も6000人弱にまで半減し、この町は、ヴォルフエンビュッテルというその名をもじって「ルンペンビュッテル Lumpenbüttel」とまで言われるほどに衰退していたが、図書館機能だけは従前通りそのまま残されていた。現在の建物は、当時の図書館の裏手に1887年に建替えられたものであるが、それまでの学術的・文化的名声の伝統を引き継ぐ、石造りの、名実共に素晴らしい図書館である。館内には、天井近くにまで配架された貴重な図書資料に囲まれて、大きな二つの地球儀と一つの天球儀が展示されていた。恐らくこれらを眺めながら、彼はイェルサレムを舞台にしたあの有名な戯曲『賢者ナータン Nathan der Weise』(1778)を書き上げたのであろう。図書館手前の左側に建つレッシング・ハウスは当時のままで、建物の近くには、この戯曲の主人公であるナータン像が、訪れる人々に理性と寛容の大切さを訴えかけるかのように立っていた。

ところで、この『賢者ナータン』の成立に先立って、レッシングは大きな喜びと悲しみを体験しなければならなかった。喜びとはエーファ・カタリーナ・ケーニヒ Eva Catharina König との結婚(1776年10月8日)である。彼女とは既にハンブルク時代に値遇

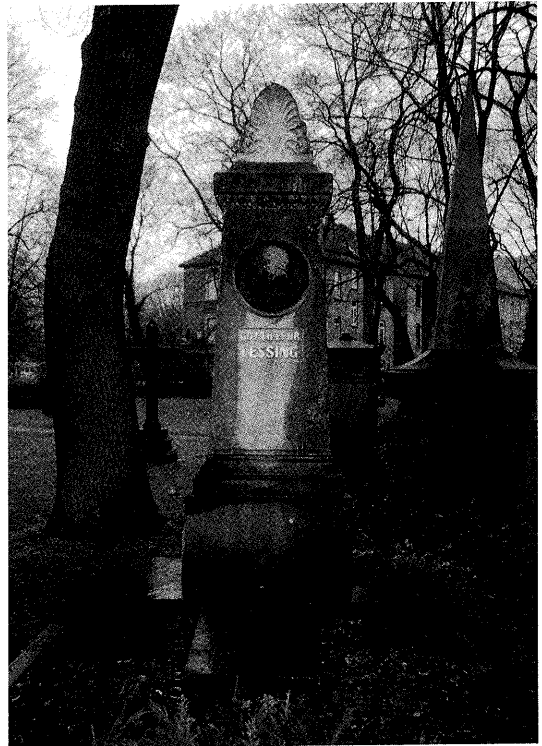


レッシングの妻エーファ

を得ていたが、彼女の夫が亡くなったあと、その4人の子どもと共に、エーファをヴォルフエンビュッテルに迎えたのだ。子どもたちの証言によると、レッシングは「優しい家族思いの父」であった。やがて、翌年の12月25日、彼女はレッシング・ハウスの一室で男の子を産む。しかしこの最高の喜びは一瞬にして最大の悲しみに転じてしまう。息子のいのちは24時間という短いものであった。しかも彼女自身、激しい産褥熱に冒され、2週間後の1月10日、子どもの後を追うかのようにして亡くなってしまった。そしてこの悲しみに追い打ちをかけたのが、あのハンブルクのルター正統派牧師ゲツェである。かくして二人の間に激しい「断片論争」が繰り広げられるが、しかし宗教と結びついた政治的国家権力の前に、やがてレッシングは神学論争の中断を余儀なくされる。そこで彼は、愛する妻の死後、その死の部屋を仕事場とし、自己の宗教的信念のすべてを『賢者ナータン』という戯曲の中に注ぎ込む。そして、ユダヤ教とキリスト教とイスラム教とを「三つの指輪」に譬えながら、三つの内のどれが真実の宗教（指輪）であるのかという問いに対しては、それぞれの偏狭な宗派的・独善的真理をもって即断さるべきものではなく、真理への理性的・寛容的努力をもって証せらるべきことを、この作品を通して力説したのであった。また、主人公のユダヤ人の賢者ナータンにはベルリン時代の親友メンデルスゾーンの面影が、偏狭な独善的大司教にはハンブルクの主席牧師ゲツェの姿が読み取れるところに、この作品の別の面白さがあるように思われる。

ブラウンシュヴァイクBraunschweig：ブラウンシュヴァイク、ここはレッシングの終焉の地である。死期の近づきを予感したのであろう。病状の悪化をおして、1781年1月28日、彼は旧友たちとの最後の別れを願うかのように、ヴォルフエンビュッテルからブラウンシュヴァイクへと向かう。そして2月15日、彼等に見守られながら、53才の生涯を閉じたのであった。今、マグ

ニ墓地 Magni-Friedhof で彼は静かに眠っている。「人間の最も高貴な仕事は人間になることである…」(Die edelste Beschäftigung des Menschen ist der Mensch...) と訴え続けながら。



レッシングの墓



ブラウンシュヴァイクのレッシング広場の立像

学会参加報告

IAHR 第19回世界大会参加報告

国際仏教研究 研究補助員 齊藤 研

「国際宗教学宗教史会議」The International Association for the History of Religions (IAHR) は1950年に設立され、現在は40ヶ国余の研究団体(学会)を網羅する世界最大の宗教研究者の国際学術団体である。宗教学ならびに宗教を対象とする諸研究の発展のための国際的ネットワークを構築することを目的とし、五年に一度世界大会が行われている。

また今回の大会を主催した日本宗教学会は、1930年の設立であるが、当初から国際宗教学宗教史会議と深い関係を有してきた。1958年には欧米以外では初めての世界大会として東京で大会が開かれ、日本の宗教学研究に多大な刺激を与えることとなった。今回の開催は日本で最初に宗教学講座が開設されてから100周年、日本宗教学会設立75周年の記念すべき年であることを鑑み、再び日本に招致することになったものである。

このような大会へ大谷大学として参加するにあたり、まずはどのようなテーマで参加するかが検討された。

大会総合テーマは、「宗教—相克と平和」(Religion: Conflict and Peace)であった。その中で真宗・仏教を根幹に据える大谷大学がパネルを提供することの意味を明確にすることから検討がなされた。そこで「相克と平和」に対して、親鸞における特徴的思想である「悪の自覚」を柱としてパネルを構成するというプランが立てられた。

パネルテーマは、「悪の自覚と現代社会—親鸞思想を中心として—」となった。親鸞教学において、「悪」は人間存在を語る上で重要な概念であり、そしてまた悪の自覚は同時に救済の確信であるところに思想的特徴がある。このことが現代社会にどのように関係を持ち、相克から平和へと寄与することが出来るのかがパネルの中心課題であることが確認された。

大会当日のメンバーは、発表者は、一楽真(本学助教授)、鍋島直樹(龍谷大学教授)、スサ・ドミンゴス(南山大学講師)。コメンテーターとして、門脇健(本学教授)、マイケル・パイ(本学客員教授)とした。司会は本研究員木越康、井上尚美の両名である。

発表者の三人からは順に、「悪の自覚が開く世界、悪の自覚から始まる生き方」「悪人の救い」「悪の自覚と倫

理的実践の関係」という発表がなされた。

第一番目の発表者、一楽真助教授からは、苦からの解脱ということが仏教の根本課題として挙げられるが、その苦しみとは、「関係の中での苦しみ、悩み」であるということがまず確かめられた。そして、仏教が掲げる「十悪」の問題もまさに関係の中での悪であり、そのことが起こってくる根本が意(こころ)の問題であるとされ、そのことを「意(こころ)の熱」という言葉で表現した。そして親鸞の観山下山の意味を、

自分の力で、傷つけ合わないことを実現するのではなくて、阿弥陀仏によつてたすけられないといけない、そういう自分に目が覚めたということである。これが親鸞における「悪の自覚」である。(中略)いくらまじめに生きてもお互い傷つけ合っていくという人間の問題に直面したのだ。それを越えるには阿弥陀仏に依らなければならない。こういう教えとの出遇いであつたのだ。

と述べた。このような問題を踏まえ、『観無量寿経』の韋提希と釈尊の教説を紹介した。韋提希は、王舎城の悲劇として語られる問題に遭遇した時、釈尊に対して愚癡を言う。釈尊はその韋提希の愚癡に対して一切反論をしない。一楽氏は、泣き叫ぶ韋提希に黙って寄り添う、これが「お釈迦さまの一番大事なケア」であるとし、そのことによって起こる韋提希の内の変化を、「凡夫の自覚」として押さえた。これは韋提希によって浄土が、関係の苦しみや争いのない場所として選ばれたということではなく、阿弥陀仏に導かれて生きていかなければならない私である、ということが明確になったのだ、と述べられた。

そしてそのような「悪の自覚」にどのような生き方が始まるかについて、以下の三つの点から発言があつた。それは、「自らの正当性を立場としない」「関わり全体が持つ問題を見抜く眼を獲得する」「教えられた恩徳にこたえていく」である。これは、自らに都合のいい者を仲間とし、都合の悪いものを敵としていくことからの開放であり、自らが正しい、間違っていないとの思いがどれほどいい加減かを知ることであり、自らが教えてもらったことを、その後の人達に伝えていくという課題と使命

を持つ生き方への転換である。それが親鸞の言葉で言えば「報恩」であり、感謝の生活の始まりである、と発表を結んだ。

この一楽氏の発表を受けて、鍋島直樹教授は、「悪人の救い」を阿闍世王の救済を通して発表した。悪人の救いを阿闍世を通して明らかにしている箇所は、『教行信証』「信巻」である。この中で親鸞は最も重く、治し難く、必ず死に至る三種の病、すなわち謗法、五逆、一闍提について言及している。阿闍世はこれらの三つの病に冒された象徴的存在である。この教言で鍋島氏が特に注目したのが、阿闍世の瘡が急激に増える場面が二度あることであった。一度目は、母韋提希より看病を受けた時。二度目は、天から父頻婆娑羅より「耆婆の言葉に随い、六臣の言葉に随ってはならない」との声を聞いた時である。鍋島氏は「瘡は阿闍世の父、母への悪逆に対する自責の念と後悔を象徴している」と押さえ、自らを両親が憎んでいたと思っていた阿闍世は、両親の優しさで慈愛を知ることによって、ますます自らの罪の深さを知らされ、それによって一層瘡が増劇したのである、と語った。

この阿闍世の瘡は仏陀の月愛三昧の光明によって癒やされるが、鍋島氏は月愛三昧に二つの意味を見出している。それは、

第一には、月愛三昧は、とがめることない、無条件の受容を示している。「何かをするのではなくて、そこにいること」、それが月愛三昧の真意である。

第二には、仏の月愛三昧は、世間的な言葉を交えることなく静かに瞑想することの重要性を示している。(中略)換言すれば、阿弥陀仏の限りない慈悲の光にいだかれて、人は自らの愚かさを知るのである。

このような了解は、一楽氏の発表における釈尊の韋提希に対する接し方、すなわち黙って寄り添うというあり方との関連を見ることが出来るように思われた。

鍋島氏は最後にそのような罪悪の自覚を通してどのような倫理的姿勢が開かれたのか、ということ以下のように結んでいく。

第一には、阿闍世は頻婆娑羅の死後、両親が自分を愛していたことを知った。その結果、自らの愚かな行為を痛切に感じた。

第二には、耆婆が阿闍世に寄り添い、「罪を感じて生きることが人として生きる道である」と示した。それによって阿闍世は正直に自らの罪に向き合うことができるようになった。

第三には、仏陀の阿闍世に対する信頼が、罪に苦しむ人間を救い、その人を、あらゆるものに対する

思いやりをもった人間へと成長させる原動力となっている。

三番目の発表者であるスサ・ドミンゴス講師は親鸞における悪の自覚と倫理的実践の関係を検討した。まず親鸞における悪について、これが相対的倫理的な悪ではなく、絶対的宗教的悪であることを強調した。この悪は、人間の本質的なものであり、人間存在そのものの中に根差しており、人間自身の力ではそれを根絶することが出来ないとする。

親鸞における悪の自覚は、信心と切り離しては考えることが出来ない。悪の自覚は自力や反省によって出来るのではなく、常に阿弥陀仏の本願のはたらきによる。この両者の関係をドミンゴス氏は、

どこまでも相互循環的である。悪の自覚が本願をうち開き、本願の世界が悪の自覚をよびます。

と捉えた。そしてそのような信心を獲得した後に、如何なる倫理的実践が伴われるのかについて次のように語った。

善は人間の自力によってではなく、願力自然によって為されるものである。すなわち、人間のはからいが一切なくなったところに自然があり、柔和忍辱という善が、人間の心におのずから生ずるのである。つまり、柔和忍辱こそが信心獲得の人の倫理的実践であると述べるのである。親鸞における倫理は、当為としての「善を為すべし」という原理に基づく倫理ではなく、願力のはたらきとしての自然に基礎づけられる倫理である。

そして親鸞の思想とキリスト教の間にある根本的相違を次のように押さえた。

親鸞の思想における悪は人間存在そのものであり、必然的に生ずるのに対して、キリスト教の思想における罪は人間存在そのものでも、必然的に起こるのでもなく、自由意志によって生ずるのである。すなわち、キリスト教の信仰は模範としてのキリストに生きることであり、必然的に愛の実践として表われる。愛の実践は、「汝愛すべし」という義務の表現を取り、信仰の倫理は強く義務的・当為的性格を持つのである。キリスト教の場合、罪は、自覚というような事柄ではなく、意志の問題である。すなわち罪とは、人間が正しいことを自覚していないという点にあるのではなく、人間がそれを自覚しようと欲しない点、正しいことを欲しない点にあるのである。

またドミンゴス氏は悪の自覚と倫理的実践の問題に関して、親鸞思想とキリスト教思想の間には、いくつかの類似点が認められる。そして根本的な相違点があることも事実である。その相違点について、特に親鸞における

悪の自覚は、他力回向の信心であり、自力のはからいや意志が入り込む余地がないとも言う。人間のはからいが脱却されたところに信心が成り立つのであり、信心においてはたらいているのは、阿弥陀の本願力である。こうした宗教的思想によって現実を変革する衝動が生じないと述べた。親鸞の思想、さらには、仏教全体における現実に対する基本的態度は、現実を変革するよりもむしろそれを超越するというところに視点がある、として発表を閉じた。

以上、三人の先生から「悪の自覚」というものは如何なるものか、そして「悪の自覚」はどのような人間を生み出すのか、ということを中心に置き発表がなされた。

この発表に対して、門脇氏からは、親鸞の思想においては、はじめに信仰があって、そこから日常倫理が基礎付けられるというよりも、日常倫理における挫折が信仰へと導くという点があるのではないか、ということが指摘された。またそのことが浄土真宗の倫理的価値に対する問題提起の一つとして挙げる事が出来るという意見が出され、バイ氏からは、それを受けて、罪や悪の自覚が無明とどのように関係があるのか、さらには、倫理に破れて信仰が生まれてくるということが、どのように社会に対して接点を持ちうるのかと問われた。

その後の質疑は「悪の自覚」そのものがどのような人間を生み出すのか、そして、そのことが果たして社会に対してどのような具体的繋がりをもつのか、という二点に絞られた。前者が信仰そのものに対する問いならば、後者は社会的関係を問うものである。特に後者の問題は、当大会の「宗教一相克と平和」という総合テーマに直接関係する話題であり、真宗が、どのように我々の生きる現実社会に関与するのかという問題である。

本パネルでこの問いに対する明確な答えを提示することは出来なかったが、あらためて真宗・仏教を根幹とする者が考えていかなければならない視点を確認することが出来たように思われる。

特別研究員研究成果報告

『アビダルマディーパ』における大乘批判 特に無量寿説をめぐって

立正大学教授 三友 健容

長い間、世親以降のアビダルマ論書は『俱舎論』の註釈書と『順正理論』以外には知られていなかったが、インドのラーフラ・サンクリトヤーヤナが1937年にチベットにおけるサンスクリット写本を調査した際、『俱舎論』の梵本をはじめ多く写本を発見した。そのなかに著者不明の『アビダルマディーパ』(Abhidharmadīpa)があり、ジャイニ博士(Padmanabh S. Jaini)が1959年にこれを校訂出版した。全体で151葉ほどあったと思われるが、84葉が欠損している。この論書は大乘仏教へ転向した世親を批判し、唯識・中観派にも言及している極めて重要な文献である。『順正理論』とおなじく『俱舎論』の文体をもとにして反論を試みているが、わざわざ世親の使用した用語を替えていて、かなり難解である。また『順正理論』説に一致するところがある一方、衆賢に関しては一言も触れておらず、『順正理論』ですでに世親を破折している箇所でも、これを採用していないなど多くの問題点を含んでいる。この研究には『俱舎論』と『順正理論』とを参照しながら、詳細に読んでいく必要がある。ラーフラが発見したのは別の文字の梵文写本(北トルキスタンプラーフミー文字B)とトカラ語B写本がトルファンから発見され¹、『アビダルマディーパ』がカシュミール有部系統の教理を汲む西域地方に受容されたことが判明してきたから、これからは西域地方やアフガニスタンなどから別な写本が発見される可能性もある。

ところで生身の佛陀は涅槃に入っても法身は常住であるという基本的な考え方は大小乗共通であるが、法身とは別に命根の持続期間すなわち仏陀の寿命も無量であるということになると理解を異にしている。

『俱舎論』(以下 *AKBh.*)は寿命が業生による異熟果ではないという立場をとっている。これに対して『アビダルマディーパ』(以下 *ADV.*)は *AKBh.* の命根説・種子説が大乘に転向した世親の説であると批判し、さらに三昧力によって自由に寿命を延ばしたり、有情を化作(*nirmaṇā*)したりすることができるとする、いわゆる佛陀の寿命が無量であると説くのは佛陀をナラエンの神と同様に考える外道と同じであると難詰して有部の正統説を展開している。そして佛陀は大慈悲があるから三昧に

よって自由に寿命を延ばすことができるとする世親説は大乗佛教、瑜伽唯識説へ導入する手段として説かれたものであると看破している。

有部でも三昧に関して瑜伽行者の主張をある程度認めているが、三昧は大乗佛教において極めて重要な言葉であり、*ADV.* は非常に慎重に考察している。その結果、三昧力によって定業も変えうらというのは、世親が瑜伽唯識説に転向しているものと捉えて批判しているのである。

一方、命根は滅尽定入定後の色心の維持機能ももち、たとえ滅尽定に入っても持続しており、出定後は心と肉体とが互いに因となって入定前の同一体を継続する。いわゆる色心互薫論はおなじく世親著の『成業論』でも経量部、瑜伽行唯識学派を巻き込んで論争されている重要なテーマであり、*ADV.* はこれらの議論を前提として有部教学の再興を志している。

寿命が無量であるというだけならば、アビダルマでも説かれないことがない²が、それは時・処・期間によって違いがある。『順正理論』は命根が異熟であるとするが、禪定の結果として得られる命根は異熟ではないという微妙な立場をとっている³。この立場は有部の伝統的な解釈であり、世親も『俱舎論』の偈頌では、命根を異熟と捉え、自己の解釈のなかで三昧によって命根を変えうらというのであるから、『順正理論』とほぼ同一の主張であるが、『順正理論』が批判する論点は *ADV.* とは異なっている。すなわち、『順正理論』は世親の主張である「[寿行を留めるには] 三昧から生じたところの、先にはなかった[諸根の大種が住す時の] 勢分を引くのである。それゆえに、この命根は異熟ではないが、その他は異熟である」という説については、不合理であると批判している⁴。

しかし、いま *ADV.* が問題とする「化作」(*nirmaṇā*)は『大毘婆沙論』にも種々出ており⁵、有部でも否定していないから、ここで問題としようとしているのは、大乘における「化作」のことである。すなわち『瑜伽論』には密意として廻向菩提の声聞が有根身を留めて化身を現すことが述べられており⁶、そのような「化作」を問

題としているのである。そもそも有部教学では佛菩提を求めようとして声聞が転根するのは忍位の段階であって、寿命を留めることができる四神通具足の阿羅漢にはもはや廻向菩提などということはありません。また有部の立場からみれば伝統的法相を無視して有根身を留めて化作することなどありえないことで、これを説こうとする世親は大乗佛教へ転向したのだと批判する。

有部によれば命根は単なる寿命というだけではなく、その有情がどこに生息しているかを決定する役目を持っている。異熟生としての命根以外に趣を決定する役目も持つ「異熟生である別の根が不断に生を相続して三界に遍在するもとなつて、現在の趣を施設する」といういわゆる阿頼耶識を暗示する学説に *ADV.* は反対する⁷。無色界に生じた者には、色法とそれを縁ずる眼等の五識がなく意識だけである。しかしこの意識には、過去の業因から生じたという性質、すなわち無覆無記の異熟果としての性質がないので、生まれたところの趣の実体がなく、意識が有漏善や下地の無漏心を起こすたびに無色界の趣ではなくなることになってしまう⁸。『成業論』は無色界に生じたものが、その生じたところの無色界の趣を維持して、種々の性質の意識を生ぜしめる働きとして異熟識がなくてはならないと主張した⁹が、*ADV.* での世親の主張も「無色界にいるものが下地の無漏心や有漏善を起こすときには、下地の識の種子を趣を施設する基礎となる」といっており、これは *ADV.* から見れば、有根身がないのに異なった意識を生ずることになるから、無色界にいるということが不可能となるはずであるし、無漏心というのは有漏を断絶する作用をもつから、この種子も断絶されることになるという矛盾を指摘する。しかもこの種子である下地の識というものが意識界を離れて行相のないものを認識するということになれば、「行相のないものは識の所縁とならない」とする有部の教学にも反する。これは阿頼耶識が種子として断絶せずに相続するという大乗転向者の世親への非難である¹⁰。

佛寿が無量であるかどうかという議論にかけてあらわれた命根説における世親の見解は大乗転向者としてのものであり、まさに「経量部の〔出現は〕あたかも現われ難い (*durvihita*) 鬼 (*vetāḍa*) が出現してしまった (*utthāna*) ように、〔有部の〕自宗に〔大きな〕打撃 (*svapaksopaghata*) を与えてしまった¹¹」と *ADV.* に言われたほど強力なライバルとなったのである。

最後に大谷大学真宗総合研究所において特別研究員として受け入れて頂き、資料閲覧などの便宜をお計り頂いたことに衷心より感謝申し上げます、ここに研究成果の一部をご報告申し上げます。

〔注〕

- 1 百済康義「トカラ語 B によるアビダルマ論書関係の断片について—Ⅲ: *Abhidharmadīpa* 註一」(『印度学佛教学研究』34-2, pp.77-84)、榎本文雄「*Abhidharmadīpa* のトルファン出土梵文写本断片」(『印度学佛教学研究』37-1, pp.93-99)
 - 2 『大毘婆沙論』(大正蔵27, 78b, 248b)
 - 3 『順正理論』(大正蔵29, 380a)
 - 4 *AKBh.* p. 43, 『順正理論』(大正蔵29, 381a)
ヤショームトラは、この説が誰のものであるか言明していないが、『光記』(大正蔵41, 62c) は経量部とし、『宝疏』(大正蔵41, 519b) は世親としている。しかし実際は『大毘婆沙論』(大正蔵27, 657b) の一説である。(『俱舍論』: 『国訳一切経 毘曇部25』p.135, 註179) *AKBh.* p.431/9、櫻部建『俱舍論の研究』p.254
 - 5 一例をあげれば、「爾時世尊化作苾芻。形容端正衆所樂見。剃除髭髮服僧伽服。」『大毘婆沙論』(大正蔵27, 1a)
 - 6 廻向菩提声聞は阿羅漢であっても一劫以上の寿行を留め、化身を現すことができるという。(『瑜伽論』大正蔵30, 749a)
 - 7 *ADV.* (p.97)、『成業論』(大正蔵31, 785a)
 - 8 『入阿毘達磨論』では「越として〔生存を〕立てる因が無いとすると、無色〔界〕に生まれた者が善〔心〕と〔有〕覆〔無記心〕を起こすとき死があり、下地の無漏心を起こすと生があるという過失に陥る」(大正蔵28, 987b、櫻部建訳166頁)とする。*ADV.* と『入阿毘達磨論』との密接な関連については、吉本信行教授が早くから指摘している。(吉本信行『アビダルマ思想』pp.35, 51, 56)
 - 9 『成業論』(大正蔵31, 784c)、山口益『成業論の研究』p.198
 - 10 *ADV.* p.225
 - 11 *ADV.* p.268
- *この成果の一部は『印度学佛教学研究』53-2に掲載予定

真宗総合研究所彙報 2004.10.1 ~ 2005.3.31

■研究所関係

◎真宗総合研究所委員会

- ◇11月18日(木) 16時10分～ (博綜館5階第4会議室)
 1. 2005 (平成17) 年度「一般研究」の選考について
 2. その他
- ◇2月1日(火) 12時10分～ (博綜館5階第4会議室)
 1. 特別研究員認定の件
 2. その他
- ◇3月16日(水) 9時30分～ (博綜館5階第4会議室)
 1. 今年度「指定研究」の経過報告について
 2. その他
- 「指定研究」チーフ・庶務連絡会
- ◇3月11日(金) 13時30分～
(響流館4階真総研ミーティングルーム)
 1. 今年度の研究の進捗状況について
 2. その他
- 「一般研究」研究代表者説明会
- ◇3月22日(火) 10時30分～
(響流館4階真総研ミーティングルーム)
 1. 研究遂行上の準備と諸注意について
 2. その他

■指定研究研究会

大学史研究

【研究会】

《作業連絡会議》

※旧学事史研究、旧清沢満之研究、大谷派教団近代史研究のそれぞれの作業、研究状況について報告。問題点を摘出し、今後の作業課題について検討。

2004年

- ◇11月8日(月) 16:10～
(響流館4階真総研ミーティングルーム)

- ◇12月13日(月) 16:10～ (同上)

2005年

- ◇1月17日(月) 16:10～ (同上)
- ◇2月14日(月) 16:10～ (同上)
- ◇3月11日(金) 16:00～ (同上)

【調査】

- ◇10月16・17日(土・日)
清沢満之記念館(愛知県碧南市)調査。
(参加者: 加来雄之<研究員>、日野圭悟<研究補助員>)

国際仏教研究

《研究活動》

“An Anthology of Modern Shin Buddhist Writings”のニューヨーク州立大学 The State University of New York からの出版に向け、清沢満之、曾我量深、金子大栄、安田理深の四氏についての Bibliography を作成した。

関係大学図書館や関係学会のデータベースからデータを抽出。各教学者の著作(全集、選集)はもちろんであるが、四氏についての研究書、研究論文についてファイルメーカーを用いて作成した。特色としては、著作、論文の日本語での題名、著者名、出版社、出版年などの通常の項目に加え、ローマ字による読み方を併記した点にある。これにより、日本語を母国語としない研究者でも、書名などを読むことが可能となる。

《研究会》

- (1)2005年度3月に開催される「国際宗教学宗史会議第19回世界大会」へのパネル参加に向けての準備会並びに参加。
 - 2004年12月8日(水) 18:00～
(真総研ミーティングルーム)
 - 2005年3月4日(金) 17:10～
(真総研ミーティングルーム)
 - 2005年3月17日(木) 18:00～
(真総研ミーティングルーム)
- 前参加者を招いての、事前ディスカッション。
- 2005年3月26日:14:00～16:00
東京においてパネル発表。パネリストにスサ・ドミンゴス(南山大学講師)、鍋島直樹(龍谷大学教授)、本学から一楽真助教授の3氏。司会は木越康(当班研究員) 通訳は井上尚実(当班研究員) コーディネーターには門脇健(当班研究員) マイケル・パイ(本学客員教授)の両氏。

- (2)2005年5月5日(水)～8日(日)に開催される第5回フルフ・オットー・シンポジウム参加に向けての事前研究会を適宜行った。

西藏文献研究

《研究会》

- ◇10月20日 14時30分～
- ◇10月27日 14時30分～
- ◇11月2日 14時30分～
- ◇11月10日 14時30分～
- ◇11月12日 13時30分～

◇11月16日 14時30分～

◇11月18日 18時～

(響流館3F 演習室6)

ケツン(嘱託研究員・西藏大学文學院講師)氏

『アヴァダーナ如意樹(rTogs brjod dpag bsam 'khrishing, Avadānakalpalatā)』第24章ヴェッサンタラの物語講義

講義はすべてチベット語で行われ、研究員・三宅の通訳のもと、内容の理解に努めた。

数多くの難解な点も、氏の講義により、より深く理解することができた。

またその講義スタイルに触れることで、チベットの伝統的な学習方法の一旦に触れることができた。その成果として当該章のチベット語テキストおよび和訳をWeb ページ上で公表している。

http://web.otani.ac.jp/cri/twrp/studo/avadana/avadanakalpalata24_tib_w.html,http://web.otani.ac.jp/cri/twrp/studo/avadana/avadanakalpalata24_jtradukajo.html

◇11月17日 17時50分～ (響流館4F 会議室)

ケツン氏

「チベット文学史における『古代・近代・現代』という時代区分について」

日本ではなじみの薄い「チベット文学史」というジャンルに関する研究の一端を披露して頂いた。学外からの参加者も多く、盛況であった。

◇3月11日 9時30分～ (響流館演習室1)

小島正美(東北工業大学教授)氏

「オブジェクト指向設計法によるチベット文字自動認識システムについて」

コンピュータによるチベット語の自動認識について、長年の研究蓄積のある小島氏より、開発の現状について伺った。我々チベット学研究者が手軽に使えるシステムのあり方や、今後のチベット語文献テキスト・データベース構築への活用に向けての意見交換を行った。

漢文文献研究

第6回研究会

日時：2004年10月15日(金) 16:10～

場所：真宗総合研究所ミーティングルーム

(響流館4F)

検討事項：・大谷大学蔵『教行信証』現物調査にあたっての課題検討

・その他

・終了後、千鳥寿司にて懇談会

第7回研究会

日時：2004年11月26日(金) 13:00～

場所：大谷大学図書館 閲覧室3 (響流館4F)

検討事項：・大谷大学蔵『教行信証』の調査・検討
・その他

第8回研究会

日時：2004年12月17日(金) 16:30～

場所：真宗総合研究所 ミーティングルーム

(響流館4F)

検討事項：・前回研究会における現物調査から得られた知見の確認

・その他

第9回研究会

日時：2005年2月16日(水) 16:00～

場所：真宗総合研究所 ミーティングルーム

(響流館4F)

検討事項：・今年度各研究会の成果確認

・その他

第10回研究会

日時：2005年3月16日(水) 16:00～

場所：真宗総合研究所 ミーティングルーム

(響流館4F)

検討事項：・今年度研究会の総括

・その他

大谷大学 DB 研究

【研究会の開催】

◇DB 班第16回研究会

12月21日(火) 16:10～18:00

(響流館4階 プレゼンテーション・ルーム)

・研究報告

「デジタル画像の公開に向けて(2)―現況報告と今後の課題―」

三好圭・前田千尋

【作業部会の開催】

◇第4回作業部会

10月8日(金) 16:00～(講堂棟 DB 作業室)

・西方寺、清沢満之 Web コンテツ作成成果発表会
アルバイト学生 水田、柑本、中尾

◇第5回作業部会

11月19日(金) 16:00～(講堂棟 DB 作業室)

・学内ネットワーク公開(仮)XML、データベース化、中間報告会

本大学卒業生 三好圭

◇第6回作業部会

12月5日(金) 16:00~(講堂棟DB作業室)
・大学史研究班(旧満之研) 保管データとDB 保管データのデータ整合性についての検討会

現 職 モンゴル国立大学歴史学講師
研究期間 2005年4月18日~2005年7月16日
研究課題 「現代の仏教理論とそれに関する文献の研究」
指導教員 松川節助教授

■人事(2005年4月1日付)

研究所長 (新) 沙加戸 弘 (旧) 兵藤 一夫

□特別研究員

*新田智通

国 籍 日本
現 職 EBS (イースタン・ブディスト協会)
事務局長・編集委員
研究期間 2005年2月1日~2006年1月31日
研究課題 「部派仏教における過去仏思想の研究—Mah_pad_nasuttaとその注釈書を中心として—」
指導教員 宮下晴輝教授

*デッシー・ウゴ (DESSI Ugo)

国 籍 イタリア
現 職 (マールブルク大学博士課程在学中)
研究期間 2005年4月1日~2005年9月30日
研究課題 「現代浄土真宗における社会倫理の研究」
指導教員 安富信哉教授

*ポルク・エリザベッタ (PORCU Elisabetta)

国 籍 イタリア
現 職 (マールブルク大学博士課程在学中)
研究期間 2005年4月1日~2005年9月30日
研究課題 「現代日本における禅仏教文化の考察」
指導教員 ロバート・F・ローズ教授

*仁木夏実

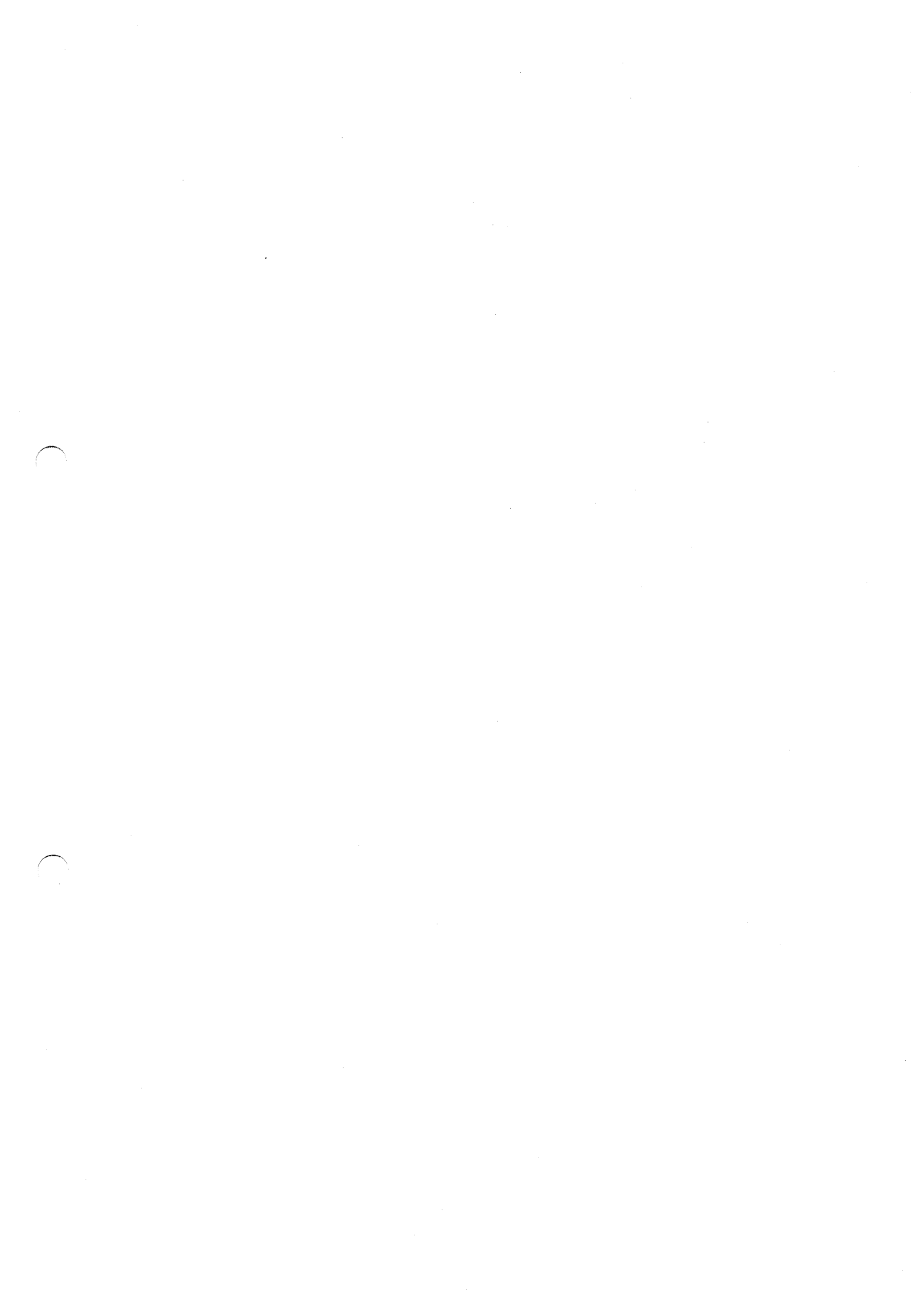
国 籍 日本
現 職 日本学術振興会 特別研究員
研究期間 2005年4月1日~2008年3月31日
研究課題 「平安時代後期・鎌倉時代貴族社会における漢詩文の基礎的研究」
指導教員 石橋義秀教授

*ダシュシヨバラニ (DASH Shobha Rani)

国 籍 インド
現 職 日本学術振興会 外国人特別研究員
研究期間 2005年4月1日~2007年3月31日
研究課題 「仏教文献における比丘尼に関するデータベース構築及びその伝記の研究」
指導教員 小谷信千代教授

*プレブジャブラハム (PUREVJAV Lham)

国 籍 モンゴル国



研 究 所 報 第 46 号

2005年4月1日 発行

編集発行 大谷大学真宗総合研究所

〒603-8143 京都市北区小山上総町

Tel. 075-411-8498 Fax. 075-411-8435